どうしてこんなことになったのだろうか。
旧地獄の火車、地獄の輪禍、火焔猫燐は心の底から考えていた。
何があったのだろうか。どうしてこうなってしまったのだろうか。
泣きたいような気持ちで、燐は地面に座り込んだ。

お空、どうしてこんなことになっちゃったんだよ。

泣くことだけはしたくなかった。泣くのはいつでも出来るはずだ。
けれども、燐には耐えられなかった。涙だけは何とかこらえ、彼女は喉を震わせた。
親友の変貌に心を痛め、地獄の変質に危機を感じながらも、誰に相談することも出来ない彼女は、大きく咆えた。
身が裂かれそうな声で、どこまでも悲痛な声で、彼女は声を上げた。
――――声を、上げ続けた。

地の陽光と天の無意

序.

その頃の地霊殿は、非常に歪つな形であった。

主たる古明地さとりは淡々と業務をこなしつつ、人型になったペット達とはあまり触れ合わない日を送っていた。

彼女は人型のペット達からは自身が嫌われていると考え――あるいは思い込んでいたし、やるべきことは多かった。彼女の地霊殿の管理の職が、彼岸から任されているものなればなおさらだった。

ただ、ここ数百年ほどは実務でなく書類作業が主だった。実務はそれぞれを得意とするペット達に割り振っていた。さとりはそれをベターな形として、そのままにしていた。実際、問題も起こっていなかった。

そうしてさとりは独りでいた。自身が嫌われ続けていると思いながら。思い続けながら。

そのペットの、最古参といえる一匹、火焔猫燐は、そんな主を気にかけつつも、与えられた仕事をしっかりこなしていた。

猫という気質上若干の気まぐれはあるものの、忠実な猫によくあるように、彼女はさとりに絶対の信頼と尊敬と――畏怖を抱いていた。それは中々会えなくなったが故の不安から来るものも、無論あった。

しかしさりとて、自分から別段会いに行くこともしなかった。さとりにはさとりの思いがあるのだろうと思っていたし、心を読まれる、というのはやはり恐怖を抱くものであった。

故に、彼女は淡々と仕事をこなしていた。ほんの少しの、寂しさをも感じながら。

もう一匹の最古参、霊烏路空は、親友とは違い何も考えていなかった。
主に甘える機会が少なくなったのを寂しがり、時折にしか帰ってこない主の妹を淋しく思いながらも、彼女は与えられた仕事をこなすことが主の喜びになると信じていた。
深く考えることのない彼女は、それを絶対のものと思っていた。それに、主達とは時折挨拶程度に顔を合わせるだけでも嬉しかったし、親友たる燐ともそうした話をすることもあった。
或いはそれは純粋すぎる想いだった。その小柄な身体には、主達への想いが一杯に、それこそ見ている者の心が痛くなるほどに詰まっていた。そうしながら、今日も彼女は地獄の天窓を開けていた。
主の妹、古明地こいしもまた、何も考えていなかった。
だが彼女の場合は、空とは事情が違っていた。彼女は何も想わなかったから。覚りの瞳を閉ざしてしまった彼女は、心そのものを閉ざした存在でしかなくなっていた。ふらりとどこかに行き、ふらりと帰ってくる。
それに関して彼女が何を思っているかは知れなかった。彼女の心は、姉であるさとりでさえも読むことの出来ない域にあったから。
そんな曖昧な存在である彼女を地霊殿の誰もが心配していたが、さりとて何ができるというわけでもなかった。そして彼女は、今日もどこかへと飛んでいってしまう。誰にもそれを止めることはできなかった。

とにかく、地霊殿は非常に歪つな形を持っていた。そしてその状況に慣れてしまっていた。それでいいのではないかとすら思わせるほどに、慣れきってしまっていた。

だが、変化は否応なく訪れた。
地上からの、新風によって。

一.

「うにゅ、暇だなあ……」

霊烏路空は、旧灼熱地獄跡を飛びながら、ぽつりと呟いた。

「お燐まだかなあ……」

ここのところ、火力はすこぶる弱かった。冬が近付いてきてるのだろう、と、その忘れっぽい頭でも思っていた。毎年のことで、この頃になると燐もだいぶ忙しくなり、空は天窓を開ける仕事が減る。帰ってきた燐と話をするのが、暇な仕事の合間の楽しみだった。

本心では、さとりのところに行きたいが、お仕事はしっかりしなければ、という使命感で空はここにいた。彼女は忘れっぽく、頭も良いとは言えなかったが、ただ真っ直ぐであり、素直であることは間違いなかった。

空は強力な妖というわけではない。その人型の姿形は主であるさとりよりも少し小さかったし、地獄鴉の中で長生きで少し力を持っている、という程度だった。だから燐には――火車としての力を得た火焔猫たる燐には、随分と心配されていた。仕方ないねえ、と言いつつ、いつもいつも助けてくれるのは燐だった。

「お空」

声に、空は満面の笑みで振り返った。声の主は燐ではない。燐ではないが、空の大事なご主人様の一人だった。

「こいし様！　お戻りだったんですね！」

「ただいま、お空」

抱きついてきた空を抱き返して、来訪者、こいしは笑った。その笑みは、明るいながら他者にどこか空虚なものを抱かせるような笑みであったが、むろん空はそんなことなど気にしなかった。空にとって

はいつでもいつまでも大事な相手なのだから、そんなことを思いもしなかった。
「今度は地上に行ったんだよ」
「地上？　あの、ずっと上にある……」
「うん、いろいろあったよ」
　こいしと空の会話は噛み合わない。こいしはただ話すだけで、空もずれた応答を繰り返すからだ。それでも、空は楽しかった。
「空は青いのよ。ずっとずっと、どこまでも」
「そら？　私、そらって見たことないです！」
　小さな羽をばたばたさせながら、空はこいしの話に聞き入った。空は、地上に出たことがなかった。地獄鴉も火焔猫も、そもそも地底に、地獄に存在するものだから。
　こいしはただ話す。それが空に何を与えるかも知らず。何を考えさせるとも思わず。ただ話し続ける。否、喋り続ける。
「綺麗だと思うよ。きっと」
「そら、かあ……」
「そうだね、お空。お空の名前と一緒だね」
　だからきっとお空も綺麗。それだけを告げて、こいしの姿が消えた。またどこかの無意識の合間に入ったのだろうが、空はこいしの残した言葉を反芻していて、それに気を留めなかった。
「そら……」
　空は、自分の名前が好きだった。さとりにもらった、大事な名前だったから。どれくらい昔かも覚えていない昔の話。まだ人の形すら取れなかった昔。
『そうね……空、というのはどうかしら』
　さとりが優しい笑みとともにくれたその名前は、空の宝物だった。
「地上、って、どんなところなのかな」

怖いところと聞く。地下に封じられた者達が行ってはならぬ場所だと。それでも、いやだからこそ、地上への憧れは強く。
「……私がもっと強かったら、地上に行けたのかな」
空はぽつりと呟いた。そうではない、ということは、本来わかっていたはずだったけれども、空はそのとき、そう思った。

私が、さとり様やこいし様やお燐を守れるくらい強かったなら、みんなで地上に行けるのかな。

小さな夢想のような呟きは、弱々しい溶岩の熱に溶けて消えるはずだった。消えるはず、だったのに。
「ほう、鴉、お前さんは力が欲しいのか」
「待ちなって、それだけの力があるかどうか聞かないとさ……なあ鴉よ、この辺りで一番力の強い鴉ってのは、誰だい？」

空の全てを変える二つの声が、背後から聞こえてきた。

そして、空は選んだ。自分の望むものを。自分の望む力を。
大事な者のために。大事なことのために。ただそれだけのために。
——彼女は、全てを失わんとする道を、選んだ。